



ものづくりの想いを伝えたい。生粋の大阪生まれのプロダクトを大阪府が認証し、プロモーションを通じて大阪のものづくりのポテンシャルを広く伝えています。新製品・クリエイティブワーク・地場伝統技術の3つの部門があります。



平成27年度  
大阪製ブランド認証制度の募集を開始しました  
募集期間 2015年6月1日(月)～9月18日(金)必着

Topics  
1月末の発売以来、テレビの出演が全国放送を入れて5本と大反響

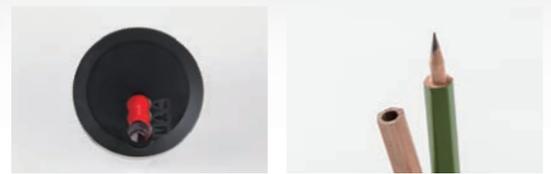


## 鉛筆をつなぐ、 想いをつなぐ、 もったいない精神

まさにコロンブスの卵。書いて書いて、短くなってしまった鉛筆は、これまでは捨てるしかなかった。しかしこのTSUNAGOは「短くなった鉛筆を継ぎ足して使う」というまったく新しい角度から発想された。1本の鉛筆の先端を凸型、もう1本の後端を凹型に削り合体させ、短い2本の鉛筆を1本につなぐというもの。誰もがはじめて書くことを覚えた鉛筆、それは「創造の道具」でもある。鉛筆が持つ木の香り、これしか表現できない黒の濃淡。さらさらと流れる黒鉛が、想いを綴り、夢を膨らませてくれた。想いがつまった鉛筆をつなげることで、想いもつなげたい。そんなコンセプトから商品をつくったのは、老舗小型鉛筆削り器メーカーの中島重久堂。OEMも含めると年間生産量は約600万個。その品質は国内はもとより、欧州最大のインテリア見本市でも高い評価を得、独自の販路開拓につながっている。この商品は、北陸地方の発

明家がプロトタイプを開発し、特許を取得。同社に商品化をもちかけたもの。鉛筆を凹凸に削る発想、もったいないという気持ちから生まれた製品であることに感銘を受け、製作にとりかかった。まずデザインをイチから練り直し、金型から新たに作成した。その費用はクラウドファンディングで募ることで、資金調達とともにプロモーションにも活用。販売前から話題を呼び、ネットでの告知から約1ヶ月で初期ロットの4000個は完売し、大型専門店での発売も決まった。多くの人の心に響いたのは、日本人が古の昔から持ち続けていた「もったいない」という気持ちだ。鉛筆削り器の刃に刻印された「NUK JAPAN」の刻印は、自社製造したことを示すだけでなく、確かな品質の証明でもある。初の自社商品であるTSUNAGOにはNUKと共に、「Made in OSAKA JAPAN」の文字。大阪でものづくりをするクラフトマンの矜持が、誇らしげに刻まれている。

つなぐ鉛筆削り TSUNAGO  
株式会社 中島重久堂  
<http://www.njk-brand.co.jp/>



「TSUNAGO」には3種の機能が付いている。鉛筆のお尻に凹の穴を開ける第1の穴、鉛筆の先を凸の形に対応させるべく削る第2の穴、そして整えるための第3の穴。凹型と凸型に削られた鉛筆は木工用ボンドで補強すれば、一本の鉛筆に。

## 予想金額

Topics  
昨年四天王寺に「和紙のお仕立荘」がオープン！  
プロの試作に対応



## 使う人の嗜好に 寄り添った、 普段遣いの和紙

富士山や鳥の可愛い柄に惹かれて手にとると、その柄が実はお札に使われているモチーフだと気がつく。しかも微妙に大きさの違うお札にジャストサイズ。お札がぴったり入る和紙袋には、お金は包んで渡すという日本人の美德を切り口に、思わず微笑んでしまう遊び心が込められている。だから買う方も「あの人に渡す時には」とシチュエーションに思いを巡らす。和紙卸商、活版印刷、プロダクトデザイナーによるブランド「off」が目指すのは、普段使いの和紙。渡す人の気持ちが込められる、コミュニケーションのフックになる商品に和紙という素材との親和性を見出した。大阪はものづくりの街であると同時に、それを扱う卸商も多い。全国から集めた和紙を、卸の膨大な知識とデザインの力をつなぎ合わせ、今度は全国に発信する。それは実に大阪らしいスタイルかもしれない。

お札がぴったり入る和紙袋  
株式会社オオウエ  
<http://www.ouue.co.jp/>

Topics  
ショールームでもある江戸堀の路面店では  
ここしかない商品に会える



## 日ごとに愛着が 増していく、 「道具」としての革財布

「愛着感じるものづくり」をテーマに、革製品を手がけるMUNEKAWA。厳選した革を職人の手仕事で仕上げ、上質な革の魅力を贅沢に味わえるミニマルなデザインと耐久性に信頼を寄せるファンは多い。ENCASEは封筒をイメージし、表面から背面まで1枚の大きなパーツを使用。スリムでコンパクトながら6枚のカード入れと2ヶ所の札入れを装備し、パスポートまで収納可能。指でスライドさせ、紙幣を1枚ずつ取り出す所作は優雅にさえ映る。革はしっとり滑らかな質感を持つ、イタリア産植物タンニンなめしの牛革を使用。革の最大の魅力である経年変化も、時を重ねるごとに光沢と美しさが増していく。生活を豊かにする道具としてつくられた革製品。それはいつしか、人生という時間をともに旅した愛用品になるだろう。

ENCASE (エンケース)  
株式会社 鶴見屋 MUNEKAWA  
<http://www.munekawa.jp/>

### Access



※時間は公共交通機関を利用した場合の目安です。



## MOV,press 2015, JUN. VOL.013

### Published

MOBIO (ものづくりビジネスセンター大阪)  
大阪府商工労働部中小企業支援室ものづくり支援課

### Staff

チーフエディター	浅野 由裕 (株式会社ファイコム)
エディター	阪本 聡子 (株式会社ファイコム)
アートディレクション	前田 敏幸 (株式会社ファイコム)
フォトグラファー	北尾 浩幸
ライター	町田 佳子
プリンティングディレクター	野村 いずみ (有限会社山添)